

power SRAMBLE

クラシックベンチで活躍
する大谷重司選手が読売新聞で大きく報道されました。

ベンチプレス ベンチの上に
あおむけになり、両側に重り
の付いたバーベルを真上に挙げ、
その重量を競う。年齢や体重別で
階級がある。五輪競技ではないが、
国際パワーリフティング連盟(I
PF、本部・ルクセンブルク)
毎年、世界大会を開いている。

全盲の大谷重司さん
(60)東京都調布市は5
月、フィンランド南部パン
ターで開かれた「ベンチプレ
ス」の世界大会で155kg
を挙げた。昨年と同じ大会
での自身の記録を10kg更新
し、思わず両手でガッツホ
ースした。結果は4位(60
歳代・体重83kg級)。「目
標だった優勝は逃したが、
成長できたという手応えが
あった。内容には満足して
いる。」

生きる
語る

昨年優勝「健全者と認め合う心地いい」



「100kgが目標」と練習に励む全盲の大谷重司さん(4月、東京都調布市で)山村隆博撮影

全盲世界を挙げる

し、1回目は3位(50歳代
・74kg級、昨年は優勝(60
歳代・74kg級)した。
「障害の有無に関係なく、
記録を見て、選手として率
直に認め合う世界大会の雰
囲気が心地いい。日常生活
では差別的なことを言われ
ることもあり、心のどこか
に警戒心がある。そこから
解放される世界の舞台を
目指して頑張ることが生き
がいになっている。」

23歳で視力を失うまでは
画家を目指していた。
生まれ育ったのは富山県
福光町(現・南砺市)。テ
レビでやっていた「柔道一
白線」や「巨人の星」が好
きた。だが、運動は苦手だ
った。ただ腕の力は強く、
絵が得意だった。人物
画がうまう、同級生から似
顔絵を頼まれた。高校は美
術部で油絵を習った。「こ
のままのままで生きてい
くんかと思っていた」
美術学校に入るために、
高校卒業後、陸上自衛隊に
入って2年間で約200万
円をためた。所属したのは
金沢市内にある第14普通科
連隊。そこでも「あの人は
運動は苦手だけど絵はうま
いよ」と有名になり、ボス
として東京都国立市のパー
トで暮らしながら念願の美
術学校に通った。

美術学校に通った。
目に違和感を覚えたの
は、美術学校を終えて絵を
教えたり、看板に絵を描く
仕事をしたりしながら画家
として生計を立てる道を模
索していた時だった。
「白い雪のような点が視
界の真ん中に浮いている。
それがどんどん膨張して、
1・5あった視力は急速に
落ちて1年もたずに失明
した。大きな看板の仕事
何とか仕上げ、すぐに入
院した。ステロイド剤、点
滴、漢方薬……。手術も受
けたがダメだった」
視神経が機能しなくなる
難病だった。「見えないの
にどうやって絵を続ける
?」。アパートの一室で電
気もつけず、壁に向かって
ひとり考える日々が続い
た。1年くらいすると、諦
めの気持ちになり、鍼灸
師の学校に通って資格をと
った。

「もともと負けず嫌いな
し、失明してできないこと
が増える上逆にいろいろ挑
*
鍼灸院はやめ、都内のフ
ットウェア開発会社の専属
マッサージ師になった。来
年も世界大会出場を目指
す。失明後に作家活動を始
めて、小説も出版した。
「常識や先入観にとらわ
れれば無理だと思われろ
う。見れば無理だと思われ
る姿を見てもらい、周りの
人が一歩を踏み出す勇氣を
持ってくれたらうれしい」
(松井啓通)

「どうせできない 周囲の言葉打ち破る」

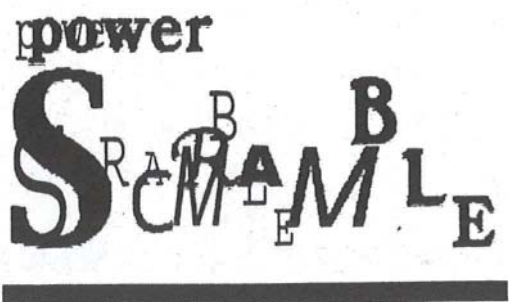
「どうせできない」と言
われた。だから「どうせできない」
じゃ」と言われるのが嫌だ
った。先入観を打ち破りた
かった。
調布駅前鍼灸院を開業
し、その傍ら、30代から空
手の油武、40代からは視覚
障害者の仲間たちと登山や
スキーを始めた。だが49歳
の時にスキーで左ひざを痛
め、運動できなくなった。
54歳の時に家の近くの障害
者施設で出会ったのがペン
チプレスだった。すぐに自
分に向いていると思った。
「60kgのバーベルから始
め、100kgを挙げられる
ようになった。でも大会に
出てみたら100kgを挙げ
られずに失格。悔しかった。
た」。スポーツジムで本格
的に習うようになり、20
14年にトルコで開かれた
視覚障害者の世界大会で1
25kgを挙げて優勝した。
だがショックだったの
は、周りの人から「障害者
の大会だからでしょ」と言
われたことだ。だからI
PFの大会に出場するよう
になった。すると、ハンデは
むしろ長所だという発見が
あった。「バーベルに付
いた重りの大きさと重量感
を見てプレッシャーを受け
ることがないからね」
*
鍼灸院はやめ、都内のフ
ットウェア開発会社の専属
マッサージ師になった。来
年も世界大会出場を目指
す。失明後に作家活動を始
めて、小説も出版した。
「常識や先入観にとらわ
れれば無理だと思われろ
う。見れば無理だと思われ
る姿を見てもらい、周りの
人が一歩を踏み出す勇氣を
持ってくれたらうれしい」
(松井啓通)

松屋の「お食事券」が
「1,000名様」に当たる!

2018 松屋復刻メニュー
総選挙

WEB投票
受付中

松屋



■ 沖縄新聞

資料提供：沖縄県、

盛 龍也

4月に福岡県で開催された、九州選手権大会マスターズ3部門で、優勝された沖縄の盛選手が大きく沖縄タイムスなどの新聞で紹介されました。肩の怪我で二ヶ月以上にも及ぶ入院生活からの復帰、さらに、全日本実業団大会優勝を目指してトレーニングしている盛さんに、南城市瑞慶覧市長から「病気を克服しての優勝は並々ならぬ努力のお陰、これからもがんばってください、と、エールを送られたとのこと。盛さんは、「七転び八起きで力を尽くすだけ」と、答え、これからの活躍と盛さんを支えてくれた奥様への感謝を述べられた、と、大きく報道されました。

病乗り越え九州優勝

瑞慶覧市長(左)に九州大会優勝を報告した盛龍也さん(中央)と妻のたかこさん(右)。南城市役所玉城庁舎

二人三脚「妻に感謝」

南城の盛さん

【南城】4月に福岡県で開かれたパワーリフティングの第3回九州選手権大会マスターズ3(60代)93kg級で、盛龍也さん(59)＝南城市知念員志堅IIがトータル335kgを挙げて優勝した。盛さんは昨年かかった病気を妻のたかこさん(59)と二人三脚で乗り越えての優勝に「治療や練習など支えてくれた妻のおかげ。次は全国優勝を目指す」と話した。

盛さんはこれまでに全国大会で11回の優勝を誇る。そのうち全日本実業団選手権大会では、2016年までにマスターズ2(50代)105kg級で5連覇を果たしており、昨年6連覇を目指していた。だが昨年10月、急に左肩が痛み出し、高熱が出る異変に襲われた。あまりの痛みで気を失うこともあった。たかこさんにせかされ、病院で診察を受けたところ、細菌が体内に入る「化膿性または結核性の関節炎」と診断された。医師には「あと数時間遅かったら命が危なかった」と言われ、絶句したという。緊急入院して30針を縫う手術を受けた。大会直前の出来事で出場を逃し、6連覇の夢はついえた。入院は2カ月に及んだ。退

■ 日本財団

パラアリーナ

オープン

6/1、お台場ユリカモメ、船の科学館前に、障がい者アスリート専用のアリーナがオープンしました。パラパワーリフティング連盟では、こちらをパラパワーの東京拠点として、週二回のトレーニングと合宿を開始しました。事故防止の観点から、連盟のコーチが帯同できる、連盟公式練習日以外の個人利用は厳禁されていますが、連盟としても、週に3回は定期的に練習できるようにと、公式NTC(京都合宿所)とともに、東京、そしてパリパラリンピックを目指す選手の育成をしていきたいと考えています。